

無縁の生活 阿部 昭



無縁の生活

阿部昭

講談社

無縁の生活

昭和四十九年十月八日 第一刷発行

著者 阿部昭

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二ノ二 / 郵便番号二二二
電話東京(〇三)九四五―二二二(大代表) / 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社



落丁本・乱丁本はお取り替えます
© Akira Abe 1974. Printed in Japan

目次

| | | | | | | | |
|-----|-----|----|----|----|----|----|-----|
| 初心 | 終末 | 手紙 | 言葉 | 散步 | 窓 | 猫 | 自転車 |
| 116 | 100 | 85 | 75 | 53 | 39 | 21 | 7 |

災難 道 天邪鬼 幽靈 童話 閣下 星

218 201 186 172 157 146 134

装幀 大沢昌助

無縁の生活

自転車

私は町の自転車屋というものがいまだに一軒として店をたたまず、それどころか大いに繁昌しているらしいのが不思議でならなかつた。色とりどりの正札のついた最新型の自転車が彼等のショーウィンドウにずらりと並んでいるのを横目で見ながら、私はあんな物を売りつけられないでも済む方法をみつけたつもりでいた。その方法によれば、私の家では向う十年でも二十年でも一台の自転車も購入せずに済ませられるはずであつた。というのも——よその土地のことは知らず——私が住んでいるこの海辺の町では、未だ十分使用に耐える自転車を道ばたに遺棄することが流行りだしていたからである。

この地区の「粗大ゴミ」集合所に指定されている近所の原っぱに行くと、自転車ならスクラップ並みの古いのからほとんど新品同様のまで、大人用から小児用まで、あらゆるタイプとサイズの自転車が何台も捨ててあつた。同じ土地の住民である私はその果敢な捨てっぷりに一驚し、このように急激に、集団的に自転車が不用になる場合について思いめぐらさざるを得な

かった。念願の自家用車マイカーに取って代られたのか、引越しの荷厄介になるので処分して行ったのか、それとも新しい自転車に買い替えたのか。それにしてもまだろくに乘った形跡もない新品がまじっているのはどういうわけか。贓品のたぐいであらうか。しかもこの町のバイスィクル・ライダーの数は、年々増えこそすれ少しも減っているようには見受けられない。どうやらこの界限には、私などの見当もつかぬ金持が多いのか、それとも物を粗末にする人間がかたまつて住んでいるのしか思えなかった。

自転車だけではなかった。普通一般の家庭で日常使われる家具調度の品目はすべてそこに数え上げることができそうだった。鍋釜からはじまって冷蔵庫にガスレンジに流し台、風呂桶に盥たらいに洗濯機、食堂用の椅子とテーブル、応接間のソファのセット、さらには柱時計、テレビ、鏡台、スーツケースの類まで一通り揃っていた。吸入器、かつら、仏壇、鰐わだかまの剝製といったようなものさえあった。つまり、大ざっぱに言って、グラランドピアノ以外の物は何であれそこで——手に入れたければ——手に入れることができるのであった。なるほどそれらの品物は、元来人間どもがいわゆる人間らしい文化生活を営むために必要に迫られてやむにやまれず發明したものはちがいがなかった。だがこうやって用済みになって一個ずつむざんに白日の下にさらされているのを目にすると、そのグロテスクさは思いの外で、まるで自分の腹からぞうもつを掴み出して見せつけられたやうなぐあいだった。なんとまあ、われわれは沢山の汚物を自分

の体内に後生大事に抱え込んでいることか！

しかし、その程度の光景にいちいちびっくりしていたのでは、時代遅れの人間と言われても仕方がなかった。もっと海のほうへ行くと、物品ばかりか、生き物もさかんに棄てられていたのである。海沿いの防砂林の松林では、マルチーズやコッカー・スパニエルが何匹も寒空にさまよっていた。縫いぐるみかしら？ そう思って近づくと、真正正銘の生きている犬なのであった。それが飢え凍えて、枯れ草を褥しとねに震えながらうずくまっていますので、遠目にはよく出来た縫いぐるみにも見えるのだった。もっとも、彼等を遺棄したのは土地の人間ではなく——この住人なら隣の県へ、箱根か伊豆のほうへでも捨てて行くはずだ——東京からはるばる一時間ドライブしてきた主人の手で、それとも知らずに冬空の下に置き去りにされたわけである。

どうしてまたそのような憂き目を見ることになったのか。それというのも、近頃の愛犬家にはおそろしく移り気な連中が多く、一種類の犬をしばらく飼うとたちまち飽きがきて別の種類のが欲しくなる。それで何万も出して手に入れた犬を惜しげもなく車の窓から捨ててしまわらしかつた。飽きる理由はいろいろだった。流行に釣られて飼ってはみたものの、毎日の世話が思いのほか面倒だったり、大きくならないペットのつもりで買ったのにどんどん肥大するので当てが外れたりして、邪魔になる。それにまた、アクセサリーとしての畜犬は、その獣の色柄やムードがマンションのインテリアにマッチしないという率直明快な理由からも処分される。

そんなわけで、この海辺の町では哀れな野良犬といえむしろ血統書付きの高級舶来犬ばかりで、むさくるしい雑犬のほうがかえって大事にされているくらいなのである。

四つ足でさまよい歩く「粗大ゴミ」のむれ！ この残忍で無表情な呼び名を前にして不吉な戦慄をおぼえない者がいるだろうか。まだ使える自転車どころか、生きている犬だっぴとも簡単に「粗大ゴミ」にされてしまうのだから、そのうちには人間もなんらかの方法で残留組と「粗大ゴミ」の組とに仕分けされて、定期的の一つ焼却炉の中で処理されてしまうようにならないものでもなかった。しかもその風潮たるや、よくよく考えてみれば、なにも今はじまったことではない。姥捨ても、嬰兒殺しも、アウシュヴィッツも、ヒロシマも、悪魔が人間という名の「粗大ゴミ」の始末に困り抜いて発明した能率的な処理法ではなかったか。

それはともかく、ここ数日また例の原っぱの一角に「粗大ゴミ」が「集合」しつつあった。二た月か三月に一べん市役所から回収日が告示されると、その一週間ぐらい前から日を追って家具調度の山がきずかれて行く。見ていると遠くからわざわざ小型トラックでステレオセットや洋服ダンスを捨てにくる人もいて、ちょっと見ると嫁入り支度でもはじめたのかと思うようだった。面白いことには、大きな品物を捨てにくる連中ほど陽気で活気にあふれていて、この情熱的な棄てっぷりを見よと言わんばかりに手荒くがらくたの只中に投げ込むのだった。彼等の気魄に尻込みしながらも散歩がてらにそれとなく近づいてみて、私はいささか気を悪くして

しまうこともあった。それらの「粗大ゴミ」が私の家で珍重しているミゼラブルな家具類よりもはるかに立派であることが多いからであった。

とはいえ勿論私はそれらの物に指一本触れるべきではなかった。私は足元にころがっている銀ピカの真新しそうなトースターをさも馬鹿にしたように靴の爪先で蹴ったりした。また、埃をかぶってはいるが最新型とおぼしいシンヤトランジスタ・ラジオも思いきり蹴とばしてやった。だがそのくせ頭のすみでは、これならまだ使えるじゃないかとか、この程度ならちょっと修繕すればまだ何年も動くだろうにとか、そんなことに未練がましくこだわっているのだ。私は物を棄てるという行為に対する自分の小心翼翼たる心理が度しがたいものに思われた。自分自身ふだん特に物を大事にしているわけでもないのに、いざ他人があんまり見事に物品を蕩尽するのを目撃すると、見当外れな反省心をかきたてられる。それは私が戦争中の物資欠乏の時代に、いやというほど節儉貯蓄の精神を吹き込まれた憐むべき〈昭和一と拵〉生まれの人間だからか。それに私はきょうは小さな息子を連れてもいた。子供の手前も父親が道ばたに落ちていた品物を拾い上げて点検したりするのは好ましくなかった。

そんなふうに好奇心を押しかくして、色彩ゆたかな「粗大ゴミ」の山をさりげなく仰ぎ見ながら、私がひそかに探しているものがないでもなかった。それは——子供用の自転車だった。私の家では上の二人に一台ずつ、いずれは下のも仲間に入ることだから都合三台の小型自転車

を常時確保しておかなくてはならなかったのである。

小学生の息子たちが欲しがっていたのは、五段変速のややこしい切換えギアを装備し、ハンドルの前にバスケット、サドルの下に怪しげな弁当箱のような物入れを取り付けた今流行のサイクリング・ツアー車だった。そのバスケットにグローヴを投げ入れて野球の練習に駆けつけるのが、この辺の小学生のカッコいいスタイルとされているようだった。ところが私も妻もそのキザな乗り物に好感を持っていなかった。第一に、それは値段が高すぎる。第二に、じきに背丈が伸びてサイズが合わなくなるのがわかっているのに、そんな玩具めいた自転車はくだらない贅沢品である。第三に、みんなが乗っているからといって人の真似をすることはない。要するに私は、その種の高価な自転車を息子に買ってやるつもりは毛頭なかったのである。

その代り、私はまず長男に町の自転車屋で中古の子供用自転車を五千円で買い与えて、しばらくはそれで我慢させることにした。今なら私は大分眼が肥えているからだまされないが、当時はいい買物をしたぐらいに思っていた。中古とはいえ、とにかく全身銀色に美しく光っていたからである——早い話が、それは例の「粗大ゴミ」の一種に銀ペンキを塗りたくり、どこころに油を注すなどして一時的に走行するようにしただけのしるものであったのだが。それが証拠には、その自転車はある日突然音もなくこわれてしまっていた。というより、ある瞬間から前の車輪が梘子てこでも動かなくなったのだった。しかし今度は私はもう自転車屋に相談に行

く気はなかった——こうしてまっすぐ原っぱへやってきたほうがよほど手取り早かった。

見わたしたところ、きょうは空き地の道路側には何台かの錆びた大人の自転車しか見当らなかった。私は脇へ回って鉄条網をくぐり抜け、廃品の山の裏手へと踏み込んだ。子供は道の端に立って心配顔に私に呼びかけ、そんなところへ行かないほうがいいという意味のことを叫んでいた。冬でも蛇が出ると思っているのだ。夏、私はこの草はらでめずらしく青いトウセミトンボを見かけて教えてやったりが、子供はその時もたえず蛇の不意の出現を警戒している風だった。私は、蛇はいまごろは眠っているからだいじょうぶだと言いながら、あたりを物色していた。そしてその冬枯れた草叢の中に、私は蛇ではなしに、まだかなり新しい子供用の——白いバスケットまで付いた——自転車が一台ひっくり返っているのを発見していた。だが私はべつに慌ても騒ぎもしなかった。手を触れようとしなかった。真っ昼間、人通りも少ないこんなところでわが子の自転車を調達しているのを近所の口うるさい主婦たちに見とがめられては面白くない——日が落ちてから取りにきたほうがいい。私は足元に横倒しになって冷たく光っている品物をしきりに値踏みして、それがいつか五千円で売りつけられた「粗大ゴミ」よりはるかに上等なものだと判断せざるを得なかった。私はその場合は遠目に目星をつけるだけで大人しく引きかえした。

三歳の息子の手を引いて通りを歩きながら、私はこの子にも当分の間はあの自転車で練習さ

せて、上手になつたら新しいのを買ってやればいいと言訳がましく考えていた。どこの誰か判らない——ひよっとしたらすぐ近くに住んでいるのかもしれない——よその子供のお古ふるをわが子に使わせるのは、父親としてはなほだ心痛むことだが、盗んだ品物ではないのだから恥じる必要もなかった。にもかかわらず私はどこからともなく、自転車泥棒！ という声が聞えてくるように思うのだった。なぜそんなことがいまごろ急に気になりだしたかというと、それにはたわいのない理由があつた——二十年以上も昔に私はそんな題名の忘れがたいイタリア映画を見たことがあつたのである。

もっとも、あの映画の自転車は今日私がうるさくせがまれているような子供の自転車ではなかつた。まだ自転車が「粗大ゴミ」に成り下がっていなかつた戦争直後の混乱の時代に、一台の古自転車を盗まれたがために父と子が悲しい一日を過ごす破目になる話だつた。棄てるどころか、古自転車が立派に質に入った時代の話だつた。長いこと失業していた父親がやっとピラ貼りの仕事にありついて、妻のシートと入れ替えに自転車を質屋から出す。そして幼い息子をつれて勇躍ピラ貼りに出かける——そんなふうには映画は始まっていたようである。だが主人公はピラを貼っている隙にその自転車を盗まれてしまう。警察に届けるが相手にされない。古自転車の市場にも行ってみる。血眼になって探しているうちに自分の自転車に乗った男をみつけるが、逃げられてしまう。父親はいらいらして子供に当りちらすが、子供は疲れと空腹でしゃ